

りますが、特に學校放送では、話す内容を相手に正しく解らせるといふことだけでなく、音聲言語の教育といふ面を考へなければなりませんので、一層この方面の苦心をしてをります。たとへ海岸風景を現はす場面でも、海岸の言葉を使ふことが出来ないのです。田舎の姿を表現する場合でも、田舎辭を使ふことは出来ません。すべて標準的な言葉によつて放送をしなければならないのです。ただ地方の児童によつて放送される「綴方發表」や「話し方」などの場合は、標準的な話し言葉にするやう努力して行ふといふ程度で許されてゐるのであります。

さてさうなると標準的な言葉で放送し得る人、即ち放送者の問題であります。單に巧みな話し手といへば、その道で専門に苦勞しておいでになる方々、俳優とか講談・落語などの一流の方々であります。併し學校放送は、ただ上手に話せばいいといふものではありません。教室で児童が聞いてゐる教育放送でありますから、表現の程度も行きすぎではありません。學校放送は面白くないとよくいはれるのでありますが、演藝放送の面白さを要求されてはこまるのであります。あまりに突込んだ、盛り上げた刺激的な表現をするのはよくないと思ひます。それでは學校教育に協力するのではなく、これを亂すことになり、邪魔をすることになつてしまひます。といつて、児童を引きつけるだけのものは持つてゐなければなりませんし、その程度が中々むづかしいのであります。

學校放送の性質上、放送は先生方にお願ひするのが最もいいと思ふのでありますが、名訓導必ずしも名放送者ではありません。言葉の點からいひましても、東京の先生方の言葉も、決して標準的な方々ばかりとはいへないので。神保格先生のお話によれば、東京の先生方の中、標準的な言葉でお話をなさる方は、百分の一位だらうとのこととあります。甚だ心細い次第であります。或ひは嚴密にいへば一人もないのかも知れません。

「自分の言葉は立派なものだ。」と自惚れておいでになる方は相當おいでになるかと思ひますが、自分の言葉を自分で聞いてゐながら、それは他人が聞いてゐるものとはちがつたものであります。自分の聲が音波になつて、自分の耳に入つて來るだけでなく、聲帯の振動は、直接に骨格やら筋肉やらを傳はつて聴覚器官に作用してゐるのであります。したがつて自分の話を純粹に聞くことは中々困難であります。自分の姿を鏡にうつして見るといふやうに簡單にはいきません。結局一度録音にとつて、これを再生して聞くこと以外にはないのであります。自分の聲を録音して、これをお聞きになつた方もおありかと思ひますが、この場合「何といい好ましい話し振りだらう。」と感心なさる方は餘りないやうであります。自惚れがあるからかうして臆面もなくお話が出来るのかも知れません。何としても「話し方」の修練はむづかしいものであります。併し放送局としては、世間にあるものの中、いいものを採り出して使つて行く、使つて行くのではありません、お願ひして放送して頂く、といふばかりではならないと思ひます。世間に依存するのではなく、醇正な話し言葉を建設して行くことが、放送協會としての文化活動としてなすべき當然のことであると考へるのであります。

特に學校放送には、話し方に對して特別の要求がありますので、音聲言語の醇化向上を期するといふやうな、大きな望みをかけまして「國民學校國語放送研究會」といふものをつくつたのであります。會員は國民學校の先生方の中、特に國語の音聲面の研究者で、且つ優秀な技能者の方々とし、毎週一回研究に専心努力してをるのであります。幸に文部省當局の絶大なる御支援を得まして、松田・石森・釘本圖書監修官、その他西尾實先生、神保格先生、東條操先生、などその道の權威者の御熱心な御指導の下に、着々實績をあげつつあるのであります。

かうして放送の言葉は、一言といへども、アクセントは勿論、發聲、發音の方法、強弱高低、緩急、休止の時間など、細かい検討を加へ非常に苦心してゐるのであります。それでも中々褒めていたたくやうな放送にならなくて申譯ないと思つてをります。放送の言葉が、音聲言語の教育の上に大きな影響を及ぼすことを考へ、慎重の上にも慎重を期し、更に積極的に醇正な音聲言語の確立と普及徹底のために働き度いものと考へてをります。

大體學校放送の性格といふやうな點についても御了解いただけただかと思ひますが、まだまだ只今申上げました他に、ラジオの負ふべき教育活動の分野は廣いことと思ひます。今日はその一端を申述べまして、今後この方面の仕事に何かと御協力下さいますやうお願いいたしましたして私の話を終ります。

二 放送教育と技術の研究

ラジオは科學的な一つの器械であり、また器械である以上時に故障を起すこともある。そこで、その原理や操作について一通りの知識を持つことは、これを教育に利用しようとする教師にとつて是非とも必要なことである。

従來放送教育が振はなかつた原因の一つには受信設備の充分でなかつた點もあらうが、中には立派な設備がありながら少しも活用されず、空しく塵芥に包まれてゐるといふ實情も少なくなかつた。これは一つにはその器械に對する技術的な方面の知識が缺けてゐるため、障らぬ神にたたりなしいつた逃避的な態度から來たものと思ふ。

ラジオの器械を自由に使ひこなすことは單に放送教育のためといふ便宜的な面からだけでなく、それ自體文化的科

學的な生活態度としても必要なことではあるまいか。ラジオ器械の簡単な修理ぐらゐは一般教師の手で出来るやうでなければ、口に科學教育の重要性を唱へても、その實効は甚だ怪しいといはなければならぬ。

ではかうした技術はどのやうな方法で研究したらよからうか。學校生活の實際に即して考へる時、次のやうな點が先づ考へられなければならない。

およそ放送教育にたづさはるものは全校の教師であるから、輪番に時を定めて、器械の世話をすることである。勿論放送教育の中心となる教師が深い研究を持つて他の全職員を指導することも必要であるが、研究部員まかせとならぬやう常に音色の調整に注意し、効果あるよい放送の聴取の出来るやうに注意することが大切である。

次に研究の資料方法としてはいろいろ考へられるであらう。教師に熱意さへあれば、近所のラジオ相談所へ出掛けることも出来るし、また放送局の近いところでは技術方面の局員に指導を受けることも出来る。また所によつては受信機に關する講習會も時々開催されるから、かうした機會を逃さず捉へることが大切である。また簡単な知識は、テキスト「國民學校放送」や雑誌「學校放送研究」その他の印刷物にも掲載されてゐるからこれ等を参照するやう推奨する。一寸した注意と努力で見違へるやうによい効果をあらはすことも決して少なくないものである。

三 テキスト「國民學校放送」の研究と活用

放送教育の實施に當り、テキストの研究もまた大切な仕事である。テキスト「國民學校放送」は放送教育を實施する

上の唯一の手がかりとしてよい位に貴重なものである。これは現在は放送協會から全国の學校へ無料で配布されてをり、また個人での申込者にも送るやうになつてゐる。毎月一冊づつ發行され、その月の放送番組の紹介・解説を中心に必要な歌曲や放送教育に関する時事報道・受信機回答等が掲載される外、教師の時間の聴取に必要な文部省發表事項の要項等が記載されてゐる。このテキストをよく研究して放送聴取指導に充分活用することも重要な問題である。

テキストを手にして先づ第一になすべきことは、その中の「放送番組表」のところを取離して、職員室なり教室なり、目のつきやすいところに掲示し、これによつて、その月分の放送教育實施計畫を立てることである。この番組は大體變更されることは少ないが、時にいろいろな事情によつて一部分變更されることもあるから、念のため前週金曜日の「教師の時間」の後の放送豫定について聴くか、または當日朝の新聞の放送番組について確めて置くがよい。

次には、當該學年の放送番組について、その内容や形式を吟味する。大體の放送の目的や計畫が示されてゐるから聴取前によく熟讀して、指導の態度をはつきりきめてかからなければならぬ。行き當りばつたりの聴取では効果のうすいことは當然である。

例へば、教科書に連絡のある放送では、どんな點に關聯があるのか、また用意すべき教具としてどんなものが必要か等、豫め考慮するのである。

かうして、テキストから、その放送の意圖する目的をよく體して、それを教育的に活かした聴取指導をするやうに心がけなければならぬ。唯この際注意しなければならぬことは、テキスト記載の參考資料の記述が幾分抽象的なことである。これはテキストの印刷の都合上、實際の放送よりも餘程前に編輯する關係から、具體的に記すことの不可能

なことに原因がある。この點は將來出来るだけ具體的に記して貰ふやう要望すると共に、一方これだけの記述から眞意を汲んで活用する修練を積まなければならぬ。その修練を積む唯一の方法は數多く聴取する以外にはない。

數多く度々聴取してゐると、聴取指導のコツが次第に明瞭となり、テキストの讀方、把握の仕方に段々慣れて、洞察力が深くなり、放送にびつたり合つた指導が出来るやうになる。そして、授業の前に板書して置く事項とか、準備すべき掛圖とか、地圖とか、また兒童に蒐集させて置く新聞の切抜きとか、いろいろの計畫が周到になされ、放送を一段と活かして採入れることが出来るのである。

四 教師の時間の利用

毎週月・火・水・木・金の五回放送される「教師の時間」を如何に聴取し、その活用をはかつてゐるかについて略述しよう。

我が校に於ては、冬季は午後三時二十分に第六時が終了し、冬季以外は午後二時四十分を終了する。全校清掃は冬季は第五時開始前に、冬季以外は第四時終了後に時間を特設してある。従つて冬季でも午後四時には兒童は全部下校することになつてゐる。兒童が全部下校して校外外は靜肅になるので、聴取には全く好都合である。午後四時五分前に放送教育研究部員が親受信機のスイッチを入れて、各教室へ送りこむのである。そこで一方各教室では、教育實習に當つてゐる教生が主任訓導のもとで、今日の授業の反省なり、成績物の處理や、明日の授業の準備などをしてゐるの

であるが、四時になると、みな一齊に各教室のスイッチを入れて訓導・教生と共に一同で聴取することになつてゐる。

併し訓導は月曜日には教科研究部會、水曜日には職員會、金曜日には學年打合せがあるので、教生と共に毎日聴取は出来ない。

併し放送の種目によつては、特に各教科研究部員一同が集合してこれを聴取し、つづいて座談的に放送の内容について種々問題を提出し合つて、質疑應答を行つて研究をし合ふやうに力めてゐる。昨年十一月中に放送された體鍊科講座の如きは、全職員が會議室に集合して毎回これを聴取し、その後で體鍊科主任の補説を求め、つづいて實地に演練を行つたりした。即ち重要な問題の放送に際しては、全職員同時に聴取するといふことを建前としてゐる。

職員會は冬季は午後三時半から開會され、冬期以外は午後三時から開會されるのであるが、放送の時刻には協議を停止して聴取するやうに力めてゐる。

本年十一月中旬から放送された體鍊科講座即ち國民學校體鍊科教授要項の説明は、全職員で聴取した結果、新要項による體鍊の授業が活潑に校庭に展開され、投擲・運搬・格力等の新しい運動が指導され、喜びに顔を輝かせた児童たちが大地を力強くふまへ、打ち振る手にも活気が溢れたのである。放送の速報性・普及性の偉力に對し、ここでも全く感じ入つたのである。

學年始めに放送された教科書編纂趣旨の解説などは、その教科研究部でこれを聴取し、研究部主任が職員會でその要領を説明して、一般職員に傳へたのは勿論であるが、當該學年の擔任は教室に於てこれが聴取を行ひ、翌日の授業にその精神を活かすやう努力してゐるのである。

また讀本期講座は國民科研究部員が主體となつて責任聴取を行つてゐるが、當該學年の擔任も自發的にこの研究會に参加して、これが聴取に當り、聴取後の朗讀練習にも積極的に参加して、讀みの修練に努力するのである。

最近聴取した一・二の種目について具體例を示すこととする。

『國語教材の讀み方』松田監修官 十二月十五日(火)放送

「讀み方」は國語の四分節を一體的に取扱ひ、正しく讀む力を養成すると共に、正しく發表する能力を養ふものであるから、讀み方指導に於て朗讀指導が極めて大切なものとなるのである。

正しく讀むとは發音・アクセント・抑揚調子等を正しくし、その根柢となるところの教材の精神を正しく把握し、その教材の精神を正しく活かして讀むやうに力めなくてはならない。そして教材の精神を正しく活かして讀むには教材研究を充分になさねばならない。

といふやうな意味のお話があつて、つづいて朗讀に造詣の深い先生方四人の朗讀の實演があつた。

教材 初一、ヨミカタ二 十四 冬

正しい讀みと正しくない讀みとを比較して見ることによつて、正しい讀みが明瞭になるからとのお話があつて、最初に「ポツポツ讀み」の例を實演された。「『ポツポツ讀み』は文章をポツポツ切つて讀むところの素朴な讀みで、最も初歩的な讀みである。『正しい讀み』への指導は、この『ポツポツ讀み』を根柢として、そこから次第に高めて行くべきものである。」

との説明があつた。これをきいて自分の學級にも、こんな讀みの域から脱しきれぬ子供が何人かゐるなどと反省し

ながら聴取した。

次に同じく正しくない読みの例として「棒読み」の例が示された。

「讀點、句點等にもかまはず、文節にも間を置かず、立板に水を流すやうに讀むところの讀み振りである。

この『棒読み』は文章を理會せずに暗誦してゐるからすらすらと平板に讀み下すので、これなどは教材を讀ませたとはいへない。眞に理會すれば、『間』『音の高低』がついて來る筈である。従つてこの『棒読み』の程度の讀みに於ては誤讀が伴ふものである。」との解説があつた。

次に正しくない讀みの例として「行き過ぎ讀み」の例を示された。

「『行き過ぎ讀み』は、文の思想感情を自分勝手に表現せんとして行きすぎたもので、聲色めいた言葉を用ひるやうになるもので、これも『讀み』としては邪道であるから、かかる讀みに陥らぬやう警戒して指導して欲しい」とのお話があつた。

つづいて正しい讀みを二回示されて「行き過ぎ讀み」やその他の讀みと比較された。

更に「よい讀み」を數回實演された。かくて最後に四人の先生方の讀みを通じて、

「嫌味がない。よどみなく、しかも緩急、音の高低、間が程よい程、よい會話である。一語一語正確である。これは文章の理會が徹底し、文の精神がよく表現されたためである。四人の讀み振りは夫々違つてはゐるが、これは夫々に教材精神が活かされてゐるのでよい。」との解説があつた。

以上のやうな放送を教生と共に學級では聴取した。その聴取につづいて、朗讀の練習を始め「よい讀み」にならつ

て夫々實演して互に批評し合つた。他人の朗讀を聴くのはまことに容易であるが、いざ衆人環視の中で自分が朗讀するといふことは出來にくいものである。數回づつ練習をし合つてから、學級の子供の中で誰の讀みが比較的正しい讀みであるかといふ話になり、更に誰の讀みは少し「行きすぎ讀み」になりさうなどと、明日の指導の具體的目標がはつきりと掴めたのである。

また「棒読み」の子供を「正しい讀み」に導くにはどうしたらよいか、「ポツポツ讀み」の子供の指導はどうすべきか等について話し合ひ、明日からの授業に今日の聴取や話し合ひ等によつて得たものを活かして行かうと心に誓ひ合つたのである。

更に例を擧げて記さう。

「本年度教育界の動向」 石山修平教授 十二月十七日(木)放送

「去り行く昭和十七年を回顧すると、この一年間は大東亞戦争そのものが國民を徹底的に教育したのである。緒戦に於ける赫々たる戦果は、國民の精神を高揚し、國民の精神を統一し、國民の生活態度を確立した。宣戦の大詔を拜して國民はその進むべき道を明確にお示していただき、教育者は教育の目標を與へていただいたのである。

即ち大東亞戦争によつて教育を高度國防國家建設といふ國策の全貌から考へることとなつたのである。」といつて我が國教育の眞の在るべき地位を明確に述べられたのである。

かくて教育界の動きについて初等教育界より逐次各部門の動向について述べられた。

「初等教育界は國民學校といふ新しい體制に出發した二年目で、内容の充實といふ方面に動いて來たのであるが、大東

亞戦争はこれに拍車をかけたのである。

昨年は國民學校實施第一年度といふ關係で學校經營の全般的研究や、全校一齊に行ふ集團訓練とか行事とかの方面に傾いたが、本年は各教科教材の研究とか、その方法等の研究が行はれたのである。即ち教育の内容にも方法にも深く入らうとする傾向を示した。

即ち全體を背景にして個々に入らうとする行き方を辿つたものである。これは極めて必要なる研究で妥當な方向といふべきである。

來年は更にこの方向を強化して各教材の研究に深く入る必要がある。ここ數年來初等教育界には理論が衰亡し、理論に基づく實踐が少ないといふ寒心すべき状態を示してゐた。

従つて來年は理論に基づくところの實踐を通して教科教材の個別的部面に深く入る研究を強化すべきものと考へる。教師用書や雑誌『國民教育』だけをたよりにしてゐては、實地授業には不充分である。實際家は當局の方針に基き教師用書を十分に活用し得るやう實際的な研究を續けて、戦時下少國民鍊成の上に正しい大道を開かねばならない。」と述べられて、實際教育者の向ふべき道を示して下さつたのである。なほ師範學校の昇格、青年學校教育の振興等についても述べられたのであつた。

この講演の放送は全職員で聴取した。聴取後、來年の研究問題等について石山先生のお話を中心に話合ひ、全く先生のおつしやられた通り、わが校の國民學校への出發は、初年度に全般的な研究に終始してしまつたことなどが反省され、本年度は放送教育を中心として教科の研究に入つたことに於て、全く同じ経路を辿つたことなどについて回顧したのである。

さて來年度は先生の教示に従つて、理論を背景に、時局と堅く結んで堅實な教材の觀方に、その實際授業の方法に深く突き進まうと語り合つたのである。

我が校に於ては以上述べたやうに「教師の時間」を聴取して、出来るだけ教育實踐の上に活かすやう努力し合つてゐるのである。

五 一般放送と修養

ラジオのニュースが我々の生活と全く離れられなくなつたのは、一昨年十二月八日のあの深い感激をとほしてからである。私達があの朝、大東亞戦争勃發のニュースも聴かず、學校には受信設備もなかつたとしたならば、あの深い感激を永久に受けられなかつたであらう。あの日一日の放送聴取によつて、教師も兒童も共に魂の鍊成の軌道に完全に乗せて貰つたといつても過言ではあるまい。

若し學校に受信設備がなかつたとしても、教師が家庭なり登校の途中なりで、戦争勃發のニュースを聴取したとすれば、その日の朝禮時から兒童鍊成の態度が變つたであらう。兒童があのニュースを聴取して教師が知らず知らずにも、學校に受けても兒童は必ずや、その感激を教師に告げたことであらう。兒童が教師に告げたならば、どんな教師でも、學校に受信設備がなければ、設備のあるところへ兒童をつれて行つて聴取させたことであらう。全くあの日から我々の生活は

ラジオのニュースと不可分の関係になつたといつてもよいと思ふ。

我々はニュースに依つて、我が皇國の大生命を脈々と感得することが出来るのである。國家の要請に應へる國民練成の重責に任ずる我等教師は、常に國家の意圖を察知し、その活動の實相を究め、國家の要求するところに適確に協力するばかりでなく、これを確把して力強く兒童鍊成に當らなくてはならぬ。即ち時局に對する認識を新にしつつ教壇に立たなくては眞に生きた教育を行ふことは不可能であるといへるのである。

朝のラジオ體操について放送される修養講座は出勤時刻の関係もあつて聴取に都合が悪い向も多いであらうが、何とか都合して聴取したいものである。

幾多の苦難を経て徳を修めた名士、血のにじむやうな努力を續けた篤學の士、土と汗にまみれて勤勞をつづけられて今日の地位を築き得た産業戦士、幾度か死線を越えられた軍人、その他各部門に於て傑出した一流の人物の眞の悟の境地に立つ一言一句こそ我々の魂を呼び醒さないではならないのである。

それ等の方々の侵すべからざる氣魄はラジオを通じても深く感ぜられるのである。一たび心をこめて聴取したならばこの時間の放送を聴かすにはあられなくなり、安坐して始めの頃 聴いてゐた者も、正坐せざるを得ない程になるであらう。

朝の修養講座を聴取すると、その日の鍊成行に新たな息吹きを感じることが出来るのである。

修養講座について放送される愛國詩歌の朗讀や、偉人傑士の文章の朗讀は、我々教職に在る者にとつては全く精神の糧となるものと思ふ。

この詩歌の朗讀を通して、詩歌の精神を把握したいものである。詩歌の精神とは心の疊りを拂ひのけて、まさに物事の底に徹するところの精神である。この詩歌の精神を把握して、如何なる困難な仕事にも直面して動ぜず、物事に眞に精神を打込んで行くといふ氣概を持つやうにしたいものである。朗讀の音聲言語の方面だけ考へて見ても、正しい朗讀法に慣れるといふことから自己の朗讀法の修練ともなるのである。

夜間放送される「戦時國民讀本」や政府の發表事項の解説など、戦時國民生活として心得てゐなければならぬ事柄や進んで協力すべき事項等についての放送は、一般國民としても聴きのがすことの出来ない事柄であるが、教壇に立つ者としては特に深い關心を持たなくてはならない。

講演の放送は時局下缺くべからざる常識を深めるばかりでなく、國威の進展に伴ふ我等國民の新たに修養すべき面についての適確にして、不可欠な知識を傳達して呉れるものである。

最近放送された『愛國百人一首と愛國心』情報局第五部第三課長井上四朗氏の講演を聴いて眞に深い感銘を受けた。今私の聴取した記憶を辿つて梗概を示さう。

「愛國百人一首の中には三つのうねりがある。その一つは萬葉時代の一群、それから吉野朝時代、もう一つは幕末勤皇家の作である。愛國百人一首が選ばれたところの大いなる意義は、和歌が數島の道と稱され、日本精神の叫びが和歌によつて保たれたのであつて、これ即ち民族の命の聲である。であるから讀む人の胸をうち心を動かす歌が傳統の和歌である。

和歌の衰へたのは日本精神が衰へたのである。滿洲事變が起きて、支那事變が勃發しても、和歌はまたねむつてゐる。

た。このねむりを醒ましたのが前線の勇士の和歌であつた。今なほ低調な短歌壇に對する一大警鐘を鳴らしたのが、この愛國百人一首の選歌發表である。即ち愛國歌は歌の最上位に位すべきもので、短歌を上代のやまと歌にかへしたのである。

この選歌の發表によつて和歌の正しい道を示したばかりでなしに、日本文學の行くべき道をはつきりと示したものである。

これ愛國百人一首の選歌された意義である。愛國歌は國民の魂に呼びかけてゐるのである。日本精神を高揚せしめ、我が國體を明徴ならしめたのである。愛國歌が國民にひろまれば、國民の間に愛國の熱情がわくのである。我等の祖先の叫びが、一つ一つ新しい生命によみがへつて來るのである。愛國歌は、日本民族の精神的遺産である。古人の精神が現實に活きるのである。古人の精神によつて、後代の若者の心の中にねむつてゐた魂が、この時代に生動して來るのである。

愛國歌は日本の將來を背負ふ若き人々によつて是非とも愛唱されるやうにしたい。愛國歌は先人が大義に殉ぜんとする時、後に生れ來る人々が自分と同じやうに奮起して御國のために生命を捨ててもらひたいと念願して詠じたものだ。私の最も愛誦するものを朗誦して、この話を終らう。

君が代を思ふ心の一すぢに我が身ありとも思はざりけり。」

以上の講演を拜聴して、愛國百人一首の選歌の深い意義を理解することが出來たばかりでなく、愛國歌の眞の價値とその精神力の偉大なのに今更感激を深くしたのである。ここに於てこの歌の普及に對する熱意が盛り上つて來たのである。

である。

日曜日に放送される週間録音は、その一週間に放送された講演や國家的儀式・行事等の中で、最も國民全般に徹底させたいもの、また國民が是非とも聴かなくてはならないものと思はれるやうなものを選択して再放送されるものであるから、初回の放送を聴取し得なかつた者は是非聴取したいものであり、再度聴取していよいよ感激を深くし得るものである。この放送等は全く放送される時刻も午前十時からで、聴取には好都合である。

われわれは進んでニュースや教養放送等を聴取して自己の教養を高め、徹底した時局認識を持つて兒童鍊成に當り、「教育奉公の誠」を捧げなくてはならないのである。

結 び

國民學校放送の聴取訓練が、國民精神の高揚と皇國文化の繼承傳達との重責に任じて、高度國防國家の建設に挺身することを目的としてゐるのは絮説を要しない。かの「語りつぎ言ひつぎゆかむ」と詠んだ祖先の念願は、さながら放送聴取訓練にも當てはまるものと思はれるが、さてその實踐は必ずしも容易のわざではない。

この放送聴取の訓練を全國の國民學校兒童に生活化させると共に一億國民の日常生活に徹底させることは、相當な大事業であるに違ひない。しかし少國民の鍊成と高度國防の具現と共榮團の確立とのためには、教師たるものは放送當局の晝夜間斷なき努力改善を多としつつ、これが献身的協力による研鑽實踐の集積を以て、能ふかぎりの貢獻をする覺悟がなければならぬ。

一段階の登高とその一飛躍の建設が、前途にもたらずべき成果の全く未知數であるだけに、われわれ教師は飽くまで「教育奉公の誠」を捧げて、勇氣と忍耐のつづく限り、ひたみに建設し抜くべきである。

「徳は孤ならず必ず隣あり。」とすれば、一學級擔任教師が奮起し、一國民學校全職員が発足し、かくして學國一體に躍進する國民學校放送聴取の建設陣は、想像するだけでも爽快の極みである。しかも今後の建設工作は決して全國一律に「右へならへ」を強要することではない筈だ。それぞれ學校の傳統や設備や、それぞれ地方の實情に即して、最

善の對策を講じ、各々高度の特色を發揮するのを最要とするものであつて、常に實踐の明朗化を期さねばならない。

惟ふに全国各地には既に讀ふべき放送聴取の教育實績を擧げつつ一地方の先達を以て自ら任ずる國民學校が多々ありと聞くのは、この道のために同慶に堪へない。しかし今は最早や右顧左眄して單なる矜持や遲疑や批判に空費すべき時局でないことはいふまでもない。まことに現下の世界總力決戦は一面にはラジオによる教育戦・思想戦を以て執拗に鎬を削つてゐる。この事實を直視すれば、放送教育實踐の一日の怠りが直に國家戦力の一日の後退を餘儀なくされることは火を賭るよりも明かである。

畏くも米英兩國に對する宣戰の大詔を奉戴して、國家の總力を擧げて大東亞戰爭の完遂を期しつつある今日、教育戦必勝の大使命が我等全國教師の双肩に等しく懸つてゐることは今更いふまでもない。ここに於てか我等は我が國の學校放送教育十年の實績に鑑みて、入つては師弟同行・親子共修に努め、出でては官民一體の理會協力を強化して、今や世界に先進しつつある我が國民學校の放送聴取教育の偉大なる建設に向つて挺身奉公の誠を捧ぐべきである。

自跋

大東亞戦争の決戦第二年を迎へ、日々これ決戦、撃ちてしまひの意氣を以て必勝への教育戦を戦ひ抜かねばならぬ。放送教育はこの教育戦を勝ち抜くための一大力源である。我々訓導一同は、校長・部長・主事を陣頭に仰ぎ、大家族の親和を以て児童錬成の一途に教育奉公の誠を捧げつつあるものである。

- | | | | |
|-------|--------|--------|--------|
| 中野 藤太 | 大森 與吉 | 久世 清 | 小池 秀一 |
| 泉 節二 | 椎名 善夫 | 山下 正雄 | 植田 正次 |
| 森 孝一 | 妻倉 昌太郎 | 山崎 愛治 | 野口 竹夫 |
| 鈴木 勝男 | 加藤 富美子 | 堤 里ウ | 安藤 壽美江 |
| 福永 菊子 | 間瀬 さみ | 原嶋 ハル子 | |

昭和十八年六月二十五日初版印刷
昭和十八年六月三十日初版發行 (二千部)
國民學校放送教育の實踐
定價 三圓八十錢
特別行爲稅相當額十五錢
合計三圓九十五錢

著者 東京第一師範學校女子部附屬國民學校 代表者 時 下 米 太 郎
發行者 東京市芝區田村町一丁目テキストビル 株式會社 日本放送出版協會
印刷者 奧 屋 熊 郎
印刷所 日本放送出版協會印刷部

發行所 株式會社 日本放送出版協會

出版者登記 30002號



會員票號 一一二五二八

本社	關西社	中部社	九州社
東京市芝區田村町一丁目テキストビル 電話替東京四九七〇一 電話銀座七〇七・六二六六番	大阪市東區北久太郎町二丁目黒川ビル 電話替大阪五五九二二 電話船場三三八九五番	名古屋市西區御幸本町通四丁目 電話替名古屋一三九三三 電話本局三三九三七番	熊本市上通三〇三 電話替本局八三〇三 電話本局八三〇三番

配給元 日本出版配給株式會社

279
93

